

特集 南アジア・日本・世界

「印哲」は何を目指してきたのか?

片岡 啓

印哲=インドの哲学?

日本の「印哲」—東大・京大などのインド学・仏教学の研究²—は欧米のIndologyとは性格を異にする³。マードゥリー・ディークシットがいいとか、いやシュリーダーヴィーだ、などというネタは研究室では通用しない。夏休みにサダル・ストリートをうろつく学生も見かけない。古典チベット語をマスターしている人は沢山いるが、ヒンディー語習得者はごく僅かである。学生だけでなく、インドにしょっちゅう出かけるという先生も稀である。「南アジアがどう認識してきたのか」以前に、南アジア——少なくとも現代インドは認識されていないのである。「印哲」という名称からすると「インドの哲学」をやっているはずなのに。

答えは単純である。歴史を見ても印哲は「仏教学」とくに教理・教学の研究を中心に成立してきた⁴。

東大印哲の系譜—村上専精→宇井伯寿→中村元—

流れを単純化すれば、東大印哲は「村上専精→宇井伯寿→中村元」(以下敬称略)に代表される。大乗非仏説を唱え一時僧籍を離れた村上専精、『印度哲学研究』(1-6)に見られる地道な文献学的研究を積み重ねた宇井伯寿、啓蒙書も含め膨大な著作を残した巨象のような中村元、そして以後、印哲

執筆者紹介

かたおか けい●九州大学大学院 インド哲学

- ・ 2007、「正しい宗教とは何か—Bhāṭṭa Jayanta 作 Nyāyamañjari 「聖典權威章」和訳ー」、『哲学年報』(九州大学文学部)、66、39-84頁。
- ・ 2004、「古典インドの祭式行為論—Śābarabhāṣya & Tantravārttika ad 2.1.1-4 原典校訂・訳注研究ー」、山喜房佛書林。

kkataoka@lit.kyushu-u.ac.jp

の対象も方法も多様化してきた。

末木文美士「日本における近代仏教学の展開と問題点」

その詳細については、末木文美士(2003)「日本における近代仏教学の展開と問題点」に詳しい。末木文美士は「東京(帝国)大学における仏教学の展開」を三区分する。

第一期は「印度哲学」(=仏教学)の専任講座開設までである。オックスフォード留学の南条文雄と笠原研寿、和漢文学科における「仏書講義」の原坦山、印度哲学講座に先立って創設された梵語学講座の高楠順次郎、そして、専任講座の設置とともに就任した村上専精である。講師による仏書講読の開始から1916年の専任講座開設に至るまでは、基本的に、伝統教学(漢文仏教典籍講読)が中心であり、それに西欧由来の方法を加味したものと性格規定される。

第二期は専任講座開設から敗戦までである。代表は木村泰賢と宇井伯寿とである。両者の学問は新しいインド研究(インド学を基盤とした仏教学)を基盤とする。他方で伝統教学との関係も維持している。そして仏教一貫説の立場からインド研究と伝統教学とを統合しようとする。宇井の『仏教汎論』[1947: 48]に明らかなように「仏教の真意義は我国に来つて初めて発揮せられる」のである。

第三期(戦後)に属すのは、宮本正尊、平川彰、花山信勝、そして、既成教団と無縁だった中村元である。戦犯の教諭師としても有名な花山信勝のように、これまでの教授陣は寺の子弟、お坊様だったのである。その中村元に至ってはじめて、「印度哲学=仏教学」という一体性が疑問視される。そして、「インド→中国→日本」という1本の流れではなく、多様な仏教の形態を前提とした上で、それに合う多様な方法論の必要性が認識されるようになる。そこでは、教団内の護教論から、開かれた思想としての仏教研究が志向されるに至る。また教理から歴史へという意識転換も明確に見られる。視野を広く取れば、袴谷憲昭・松本史朗の「批判仏教」による価値中立性への批判も、この「多様な方法論」の流れの中に位置づけることができる。

まとめると、伝統的(護教論的)な仏教漢文典籍講読から、インド学の文献学的手法を加味した教理・思想研究(体系的・教判)を経て、文献学の手法による客観的・実証的な思想史研究へと至り、現代では、研究方法

の先鋭化、多様化が見られるという状況にある。なお末木文美士が注意するように、高楠順次郎が輸入したインド学の系譜は旧来の漢文中心の伝統教学の中で決して主流ではなかった。「マックスミュラー→高楠順次郎」という系譜でオックスフォード直輸入の学問として「東大印哲」を単線的に語るのは実情から離れる。

在任期間

村上専精 (1851. 5. 1 – 1929. 10. 31)	1917 – 22 ⁵
高楠順次郎 (1866. 6. 29 – 1945. 6. 28)	1901 – 12
木村泰賢 (1881. 8. 11 – 1930. 5. 16)	1918 – 30
宇井伯壽 (1882. 6. 1 – 1963. 7. 14)	1930 – 43
辻直四郎 (1899. 11. 18 – 1979. 9. 24) ⁶	1927 – 60
中村 元 (1912. 11. 28 – 1999. 10. 10)	1943 – 73
平川 彰 (1915. 1. 21 – 2002. 3. 31)	1954 – 75
原 実 (1930. 9. 9 –) ⁷	1960 – 91
前田専學 (1931. 4. 1 –)	1973 – 91

京大印哲の系譜—長尾雅人・足利惇氏→梶山雄一・服部正明・大地原豊—

松本文三郎に始まる京都大学文学部哲学科インド哲学史講座（1906–）、羽溪了諦に始まる仏教學講座（1926–）、榎亮三郎に始まる文学科梵語学・梵文学講座（1908設置、1910着任）における「長尾雅人・足利惇氏→梶山雄一・服部正明・大地原豊」という京大の系譜においても、世界的な業績として通用する実証的な文献学、特に欧米の「インド学」が目標とされてきた⁸。意外なことに、1950年、人文科学研究所にあった長尾雅人が転じて来る前の仏教學講座は、西田の門下である久松真一である。客観・実証よりは主体的な佛教哲学という別の方向性が必ずしも無かったわけではないこと、意識的に現在への方向付けがなされてきたことが推測される。羽溪・久松時代の講師であり、Sylvain Léviに師事した山口益（1895. 1. 27 – 1976. 10. 21、大谷大学）がフランスから導入した仏典の梵藏漢比較研究というスタイルを長尾雅人が継承している点は見逃せない⁹。

松本文三郎 (1869 – 1944)	1906 – 29
榎亮三郎 (1872. 4. 5 – 1946. 8. 24) ¹⁰	1910 – 32

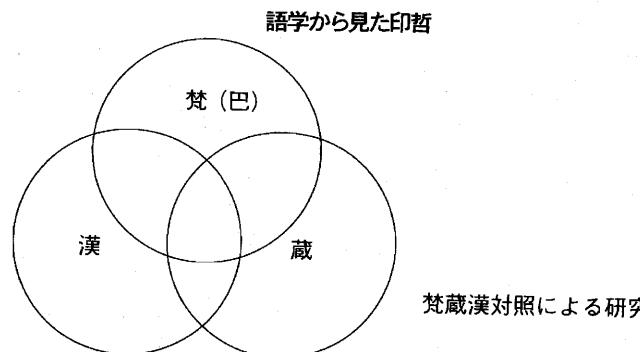
羽溪了諦 (1883 – 1974)	1929 – 43
本田義英 (1888 – 1953)	1934 – 48
久松真一 (1889 – 1980)	1935 – 49
足利惇氏 (1901. 5. 9 – 1983. 11. 2) ¹¹	1942 – 65
長尾雅人 (1907. 8. 22 – 2005. 3. 13)	1935 – 71
伊藤義教 (1909 – 1996) ¹²	1941 – 72
松尾義海 (1909 – 89)	1948 – 73
大地原豊 (1923. 3. 16 – 1991. 2. 8) ¹³	1957 – 86
服部正明 (1924. 7. 8 –) ¹⁴	1961 – 88
梶山雄一 (1925. 1. 2 – 2004. 3. 29)	1961 – 88 ¹⁵

「三聖人」(munitraya)と称される大地原豊・梶山雄一・服部正明の在任期間は、その後世界的に活躍することになる多くのインド学・仏教学者を輩出するという点で、京大印哲・梵文の一つの黄金期と見なしうる。大地原豊は、井狩彌介・矢野道雄・林隆夫の『インド天文学・数学集』の出版に寄せて、「この訳業が成ったこと自体が、インド文献学における二つの分野(略)に関し、今や我が国が若き本格的な専門研究者を擁するという事実の、端的な証左に他ならぬからである。」と「格別な私的感慨」を記すとともに、「ここに到る道程の第一歩が看取されたのは(略)僅か十年少々の過去、大学紛争期と多分に重なりつつ異例の活況を呈した京大インド学研究室においてであった。国内、学内を通じては愚か、文学部内でさえ有るや無しやの存在を出ぬ同研究室にとって、自負して憚りなき例外的な飛躍の数年間があったと信ずるのである」と描写する¹⁶。

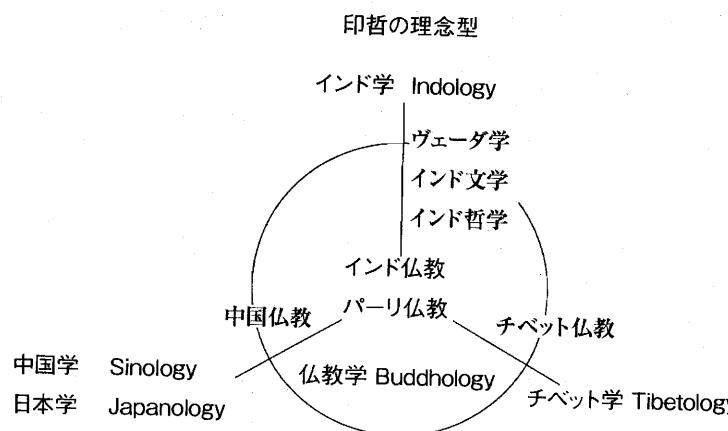
東大と比べたとき京大においては、レヴィヤルヌーに代表される西洋の「インド学」に参画するという意識の現実化する過程が強く見てとれる。

印哲の研究—実証的な文献学—

歴史はさておき、「印哲」の本質は何か、或いは、多様化する印哲の研究領域の最大公約数は何かを問うても同じ姿が見えてくる。語学において印哲でマスターすべきは梵・藏・漢である。梵藏漢対照の仏典研究というのが最もオーソドックスな印哲の研究方法であり、代表的な宇井伯壽の仕事もそうである。



このスタイルは日本人が最も得意とするところであり、世界に誇る業績が積み重ねられてきた領域である（本稿末の年表参照）。研究の中心は「インド仏教」（パーリ仏教）にあり、それを中心に、インド学（ヴェーダ学・インド文学・インド哲学）、チベット学（チベット仏教）、中国学・日本学という三つのベクトルがある。

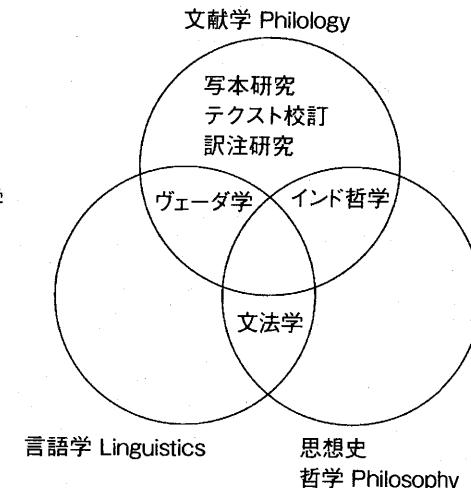


インド哲学プロパーの私の場合、立ち位置は（9、1、0）——インド9、チベット1、中国・日本0という値を取る。欧米で誰もが読むべきセットテクストと言えば、カーリダーサやマヌ法典であろうが、日本では世親の唯識二十論であったりする。

アプローチの手法という観点から見ると、現在の印哲における研究手法

には目立った三つのベクトルがある。文献学、思想史・哲学、言語学である。

アプローチの手法から見た「印哲」の領域



例えばヴェーダ学は、文献学と言語学の間にある。人によっては完全に「言語学者」である。この方面的最新の研究に、小林正人の*Historical Phonology of Old Indo-Aryan Consonants*や、堂山英次郎『リグヴェーダにおける1人称接続法の研究』が挙げられる。

インド哲学は文献学と哲学の間にある。私のように写本にまで入り込む文献学者もいれば、逆に「文献学ではなく哲学がやりたいのだ」という人も多い。宮元啓一『インド哲学七つの難問』は、滑走路作りで一生を終える喻えを持ち出している。「インド哲学研究を志した人のほとんどは、飛行機で自在に空を駆けることを夢見ていたはずである。ところが、そのほとんどの人は、その夢を忘れ、滑走路作りで一生を終ることに人生の意義を見出してしまう。わたくしは、少年のときの夢を忘れない」と。急逝した谷澤淳三は明確に哲学を志向していた。「まず、我々の研究しているものは哲学である。例えば、ヨーガ行者が水の上を歩くとか、水に何時間も潜っていられるとかの話はよく聞くが（略）一体、水の上を歩いたからそれが何だというのであろうか。それがどの程度哲学と関わるのであろうか」と¹⁷。京大理学部を出て東大印哲へと進んだ上田昇『ディグナーガ、

論理学とアポーハ論－比較論理学的研究－に顕著なように、論理学への志向は、今も昔も印哲研究者にしばしば見られるものである。ヴェーダ文献学で知られる研究者の出発点も、意外なことに哲学・思想であったりして驚かされることがある。

以上の文献学、思想史・哲学、言語学という三つの主軸のほかに、歴史学、宗教学、文化人類学、美術史、考古学、科学史などからのアプローチもあり、現在見られる印哲の多様な研究を可能にしている。2007年12月22日、京大会館で開催された第14回「インド思想史学会」学術大会において、ヴェーダ研究から出発する永ノ尾信悟、梶原三恵子の地道な文献研究と並んで、北田信、岡崎康浩によるインド音楽理論書『サンギータ・ラトナーカラ』の発表が重なったのは、本邦の「インド思想史研究」の最新の潮流を示した出来事であった¹⁸。

文献学

しかし、特に宇井以降、地道な文献学が主流となってきた。京都においても、フランス帰りの山口益（大谷大学）といった先駆者しかしり、京大の長尾雅人、そして以後の系譜においても中心は文献学である。大地原豊は、上掲の寄稿において最後に「甚だしく概括的かつ極度に感情的な、不遜の言辞に及ぶことを許されたい」と断った上で、「東洋学とは、本質的に文献学的ディシプリンとして、独り19世紀の西欧世界のみが樹立し得た所であり、当然それは我が民族の一般的好尚とは遠からざるを得ないが、しかも各伝統文明圏の上部構造に関する限り、この東洋学の研究史を離れて別箇の東洋学なるものは凡そ存在し得ないのである」と記し、西欧の文献学への参画という目標を鮮明にしている。

また服部正明は、意外なことにその最初期の論文において、西田哲学流の主体的な研究を志向している。しかし以後は、意識的に「実証的な文献学」を標榜し、「インド思想史研究会」（後に学会）を主宰するなど、日本のインド哲学研究を「るべき」方向に導いてきたのは周知の通りである¹⁹。

中村元の関心と以後の印哲

中村元のように、現代インドへの関心を持ち続け、インダス文明からネルーまで「インド哲学史」で広く論じる学者は実は例外である。現在、このような関心を持つのが、むしろタミル学者（例えば山下博司の『ヒン

ドゥー教』）であるのは必然かもしれない。

中村以後を見渡すとき、極端な専門化が進行しているのが分かる。そしてそれは資源の集中という形で「学問的」には大きな成功を収めてきた。現在インド学の多くの部門で日本人学者の世界に占める貢献・比重は大きい。またそれぞれの分野をリードする世界的に有名な研究者も少なくない。フランス留学の大地原—ただしインド・プーナにも留学している²⁰—に顕著に見られた「欧米のインド学」への志向、そして欧米のインド学の移植は、現在、完全に果たされたといってよい。例えばヴェーダ学。本国ドイツでは死滅寸前であり、むしろ日本のはうが人材は充実している。最新の『リグヴェーダ独訳』（2007）に、Michael Witzel（ライデン大学→ハーバード大学）とMislav Ježićと共に名を連ねるのは、後藤敏文と堂山英次郎である²¹。

戦後のインド留学

「その頃は、外国へ研究に行くといつても行くところがない。せいぜい中国でした。ヨーロッパやアメリカは考えられもしなかった」と長尾雅人が回顧するよう²²、戦中、欧米留学は不可能だった。戦後、高崎直道、服部正明、梶山雄一、宇野惇、戸崎宏正ら多くの研究者がインドに留学し、帰国して日本の研究をリードしてきた。現在の印哲のインド学・仏教学は直接彼らの功績に負う。高崎直道は次のように評価する²³。「それから、私個人はもう一つあるんですね。インドに直接留学して研究し始めたかどうかということが大きな影響があったと思うんですね。戦後になってからインドに留学することが普通になってきたことが大分我々のインドに対する意識を変えたので、それまではヨーロッパ人の目で見たインド研究の影響が大きかったと思います。辻先生なんかはそうだろうと思うんですけども、そういうことと、現地を直接に見ることの違いが出ているんじゃないでしょうかね」

欧米留学と現代インドへの関心

しかし以後顕著になったのは、そして現在の日本のインド学の屋台骨を支えてきたのは、高崎直道の感慨とは逆に、むしろ欧米留学組（特に京大「三聖人」の教え子達）である。私の先生の世代にあたる世代である。小林信彦（ハーバード大学、トロント大学）、井狩彌介（シカゴ大学Ph. D.）、

矢野道雄（ブラウン大学）、桂紹隆（トロント大学Ph. D.）、徳永宗雄（ハーバード大学Ph. D.）、御牧克己（パリ第三大学Ph. D.）、後藤敏文（エアランゲン大Ph. D.）、永ノ尾信悟（マールブルク大学Ph. D.）、八木徹（パリ第三大学Ph. D.）、阪本純子（パリ第三大学）、中谷英明（パリ第三大学Ph. D.）、赤松明彦（パリ第三大学Ph. D.）、林隆夫（ブラウン大学Ph. D.）など、戦中・戦後からは考えられない華々しさである。コブラ避けに飼っていたマンガースを、子供が局部を噛まれたニュースを見て泣く泣く追い出した梶山雄一のインド留学²⁴とのイメージ差に驚くのは筆者だけだろうか。

限られた専門分野において世界的に評価される成果を残す一方、そこに抜け落ちていたのは現代インドへの関心である。1961年の時点で既に大地原豊は、身近な現実の存在としてのインド共和国の実態を正しく知ることという「緊要の国民的教養」と、本来西欧に生まれ古代学的、文献学的基調をもって確立した東洋学・インド学との乖離を鋭く意識している。そして「このことの緊要を痛感する点では決して人後におちるものではない」とした上で、「わが国に関する限り、インド学的研究は当分この期待にも耐えない、と寧ろ告白しなければならない」とし、古代学・文献学に立つ「インド学」が現実のインド理解の要請に応え得ないことを率直に認めている。その第一の原因として、文献学の宿命である研究の特殊細分化を挙げ、第二に西洋のインド学に本邦の研究者が参画する際のハンディキャップという現実的不利を挙げる。冷静に現状を踏まえた上で、対象特化と資源集中によって既に2世紀の歴史を持つ西欧インド学への参画・寄与を志すという最善の策を意識して行なっていたのである。「私どもも私どもなりに、このアカデミズムの将来と、そこでなし得る自からの寄与とを確信するということである」と、「一インド学徒の弁明」をまとめている²⁵。

大地原豊の方向付けは現実化した。結果として、本邦の「インド学」においては、サンスクリットでパンティットと会話するのはおろか、ヒンディー語の翻訳・研究書を使うことも稀である²⁶。サンスクリット文献と現代を繋ぎ、そのギャップを埋めんとする情熱は低い。そのような関心を持つ例外的な研究者が、ヴェーダからヒンドゥー儀礼まで一貫してその流れを見きわめようとする永ノ尾信悟や、インド哲学・密教からネパール・チベットまで幅広く押さえる立川武蔵（ハーバード大学Ph. D.）のような民博関係者であるのは、ある意味、当然であった。

国際と国内—グローバル化の中の印哲—

国際的な発信という成功の陰で、国内一般向けの成果還元や他分野研究者との交流への意欲は減退しているかに映る。「インド学者」として一般にも名前が知られた中村元の没後（1999）、『マハーバーラタ』和訳をはじめとして一般への啓蒙活動に精力的であった上村勝彦が急逝（1944-2003.1.24）したのは痛手であった。さらに、小倉泰（1959-1998.5.）、谷澤淳三（1954.9-2007.2.20）、島岩（1950-2007.5.12）と、この方面での今後の活躍を期待された中堅研究者が突然に世を去った。印哲研究者のこの方面での活動はどうなるのか。

グローバル化の中で、印哲研究者は「印哲研究室」を離れ、個々の専門分野において、それぞれが世界的なネットワークを作っている。インド仏教中心だった「印哲」は、様々な方向に拡散し、様々な領域において若手が育っている。また、容易になったインド旅行（あるいはイギリス旅行）により写本を直接に調査することが可能となった。「大学におけるインド学が文献学のみでよいということではないが、引き続き文献学が中心となるべきである」という後藤敏文の主張は筆者も正しいと考える²⁷。

現在、写本を扱う人はむしろ増えている。井狩彌介によるヴァードウラ写本の研究や、桂紹隆による仏教論理学写本の研究という新たな方向性は、文献学の徹底という自然な流れの中にあるにせよ、後続世代にとっては「宗旨替え」とでも映る事象である。「厳密な文献学」の傾向はますます強まりつつある²⁸。写本研究者として筆者の周りで思いつくだけでも、例えば、インド学の若手では、張本研吾（ヨーガストラバーシャヴィヴィアラナの写本研究）、室屋安孝（ニヤーヤ学派関係写本の研究）がいる。仏教学では、苦米地等流（密教写本研究、『理趣経』原典校訂）、加納和雄（ゲッティンゲン所蔵写本研究）が顕著な成果をあげつつある。またNGMPPによるネパール写本利用の簡便化も見逃せない。田中公明、森雅秀、種村隆元、桜井宗信他による密教写本研究、そして、岡野潔の正量部・仏伝研究が一例に挙げられる。アフガニスタン出土の仏教写本断片（スコイエンコレクション）には本邦から松田和信が参画する。チベットに残る膨大なサンスクリット写本の校訂出版には、オーストリア科学アカデミー、北京大学、ハンブルク大学のほかに、大正大学がプロジェクトとして取り組んでいる。新たなサンスクリット写本が陸續と発見される中、写本研究の重要

性はますます高まっている。

ユトレヒト、ケンブリッジ、ベルリンなど、かつての「欧米のインド学」の基地が縮小あるいは消滅していく中、「中村元以後」の印哲、日本のインド学をどう方向付けていくのか、これからの課題である。

現在の印哲の特徴あるいは問題点

以下に、筆者の見出した「印哲」の特徴を挙げておく。それは必ずしも短所のみではない。むしろ表裏一体なものとして長所でもありうる。そのことはこれまでの歴史が語るところである。そのことを肝に銘じた上で、「もっと過激に（面白く）」という本企画の立案者である脇村孝平の意向を踏まえて、敢えて誇張した刺激の強い指摘を行なうならば——。

- 中村元に見られた総合性や、現代インドへの関心は、現在、継承されないままに終わっている。膨大な領域を独りでカヴァーするよりも、むしろ、限られた領域での地道な文献学の積み重ねを志向する傾向がある。結果として、印哲の歴史の中でも文献学的な成果が国際（＝欧米のインド学）的に評価される中で、独りで描く「インド思想史」の欠如を招くことになった²⁹。
- 中村元や上村勝彦が担っていた邦語による社会還元作業は、彼らの没後、欠落した状況が続いている。他分野と交流しうる広い視野のインド学を志向していた小倉泰の急逝は、「印哲」にとり大きな損失であった。国際的な活躍の陰で、国内的にはインド学・インド哲学の不在症状が進行中である。
- 現代インドと古典との間を埋めようとする情熱の欠落。そもそもインドへの関心の出発点が「仏教・思想」であって「現代インド」ではない。僧侶の子弟・仏教への関心といった旧来の動機以外の動機は相変わらず欠落したままである。
- ヒンディー語資料（翻訳・研究）、現代インドのパンディット的知識への無関心は、「サンスクリット会話」の重要性を意識していた中村元が嘆いた状況から一向に改善されないままである。これは、欧米の「南アジア学科」におけるサンスクリット・ヒンディーの隣接状況と全く異なる組織編成に起因するところが大きく、本邦の「印哲」の一つの特徴（短所であり長所）をなしている³⁰。結果として「欧米のインド学」か「インドの伝統」

かという二者択一を行ないがちである。現実的には、それは、ヨーロッパ留学かインド留学かという二者択一に表面化する³¹。

- サンスクリット文献研究・インド学の消化吸収（横を縦にする、外から内へ）や日本への紹介（例：上村勝彦の一連の仕事）よりも、プロとして国際的に評価される個別分野へのエネルギー資源の集中が図られている。成果の発信（内→外）の結果としての国際的な評価は高く、個別分野において邦人研究者によるリードも顕著である。「世界的に意味ある業績」「重要な成果は英語で」という（京大印哲・梵文に見られた）早くからの意識と成功は明らかである。その一方で、「欧米志向」における志向対象であった「インド学」の基地ドイツでは、旧来のインド文献学が衰退している。日本への移植において、旧来の「欧米志向」において抱えざるを得なかつた劣等感としての上下関係は、現実的には消滅している。現在あるのは国際的分業・協力の実現である。今後、（旧東欧圏も含めた）欧米のみならず、インド、韓国、中国、台湾の研究者との関係をどう構築するのかが課題となろう。

年表³²

1784	ベンガル・アジア協会 (The Asiatic Society of Bengal) カルカッタに創設
1814	コレージュ・ド・フランスのサンスクリット講座にシェズイー就任
1900	高楠順次郎（1866－1945）が東大梵語学講座の教授となる（1901） 高楠順次郎『金七十論』の仏訳（1904）
1910	榊亮三郎、京大梵語学梵文学講座の初代教授就任（1910－32） 高楠順次郎・木村泰賢『印度哲学宗教史』（1914）
1920	辻直四郎オックスフォード留学（1923） 宇井伯壽『印度哲学研究』全6卷（1924－32）
1930	宇井伯壽『印度哲学史』（1932） M.Takaku: The Sāṅkhya Kārikā Studied in the Light of the Chinese Version (1933)
1950	中村元『印度哲学思想』全4卷（1950－56） 辻直四郎『プラーフマナとシュラウタ・ストラとの関係』（1952） 中村元『印度思想史』（1956）
1960	Nagao (ed.): Madhyāntavibhāga-bhāṣya (1964) Kajiyama: An Introduction to Buddhist Philosophy (1966) Hattori: Dignāga, On Perception (1968)
1970	辻直四郎『サンスクリット文法』（1974） Mayeda: A Thousand Teachings (1979) 原 実『古典インドの苦行』（1979）

- 1980 早島鏡正他『インド思想史』(1982)
Goto: "I. Präsentklasse" im Vedischen (1987)
- 1990 Tokunaga: The Brhaddevatā (1997)
Motegi & Wezler (ed.): Yuktidīpikā (1998)

註

- ¹ 原稿に目を通し助言を頂いた苦米地等流博士に感謝する。また各種情報について、志田泰盛博士、赤松明彦教授、永ノ尾信悟教授、矢野道雄教授、伊澤敦子氏の手を煩わせた。深謝する次第である。
- ² 印度哲学・印度学・仏教学・仏教史・インド学・インド哲学(史)・梵語学梵文学・インド文学・インド古典学・インド文化学などなど、様々な名称が各時期に各大学で用いられてきているが、本稿では「印哲」と総称する。「印哲」の伝統を継承する場として、北海道大学、東北大、金沢大学、筑波大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、広島大学、九州大学の当該講座が思い浮かぶ。宗門系を中心とする私立では、大正大学、駒澤大学、立正大学、東洋大学、早稲田大学、愛知学院大学、大谷大学、龍谷大学、花園大学、仏教大学、高野山大学などが、すぐに挙げられよう。
- ³ 現在の欧米のインド学・サンスクリット学の基地として真っ先に思い浮かぶのは、イギリスではオックスフォード、ドイツ語圏ではハンブルク、ウーン、オランダではライデン、アメリカではハーバードである。かつてサンスクリット研究の盛んだった大学も、人事移動・世代交代や改組、さらに、閉鎖などにより今は見る影もないという場所も少なくない。しばしば古典から「モダン」なインド学への重心転換が図られると同時に、サンスクリット学の縮小が行なわれる。ベンシルヴァニアも、かつては文法学の大家カルドナ、インド哲学の巨星ハルプファス、法典のロシェなど充実した陣容であったが、ハルプファスの急逝、カルドナの退職により古典学は停滞気味に映る。
- ⁴ 日本の「印哲」においては仏教がまずあり、なかでもインド仏教が中心的な位置を占め、その文脈でサンスクリット語が必修として学ばれる。たいして欧米の学伝統では、インド仏教学は、東洋学>インド学>インド仏教学として位置づけられるのが通常であり、あくまでインド学の中の一分野として扱いを受ける。なお欧米においては、ラテン語・ギリシャ語を学んだ後に飽き足らずサンスクリット語まで手を伸ばしインド学者になるという古典系の人も多い。ハンガリーの友人であるサンスクリット文学の Csaba Dezső 博士(Eötvös Loránd University, Budapest)が所属する学科は Department of Indo-European Linguistics、ヒンディー語の Mária Négyesi 博士は Department of Indo-European Studies であり、「印欧語」の枠にある。
- ⁵ ただし 1890 - 1917 の間、講師を務めている。
- ⁶ Cf. 『東方學』第 43 輯(1972)の座談会の記事、第 60 輯(1980)の追悼記事。および『東洋学報』61巻、3-4号 [1980: 130-144] と Indo Iranian Journal 22 (1980) の追悼文。辻(旧姓: 福島)直四郎は、高楠順次郎、A·A·マクドネル(オックスフォード)、K·F·ゲルトナー(マールブルク)に学んでいる。
- ⁷ Cf. 『国際仏教学大学院大学研究紀要』10号、*Harānandalabari: Volume in Honour of Professor Minoru Hara on his Seventieth Birthday*, edited by Ryutaro Tsuchida and Albrecht Wezler,

Reinbek 2000.

- ⁸ 『京都大学百年史』を参照した。
- ⁹ 長尾自身「京大卒業後、京大の講師でもあった山口益先生のお宅へ入り浸っていて」と述懐している(上山大峻との対談 <http://www.ryukoku.ac.jp/university/kouhou/shuppan/kohoshi/kohoshi46/taidan.html>)。したがって、「シルヴァン・レヴィ→山口益→長尾雅人→梶山雄一」という学風の継承を見ることができる。ただし梶山雄一は「久松真一教授の影響の下に、仏教の哲学的考察を深め、「学道道場」における実究・論究に熱心に参加」して「卒業論文「報身の哲学」(親鸞の思想の研究)」(服部正明作成の「梶山雄一氏略歴」http://www.wretch.cc/blog/tiger2006&article_id=5389474)をまとめており、その出発点は異なる。
- ¹⁰ 「榊亮三郎→足利惇氏」の系譜については、例えば善波周、1978年、「道心に食あり—若き日の足利先生」、『オリエント学インド学論集 足利惇氏博士喜寿記念』、615頁。「ところで榊先生の持論は、印欧古典語すなわちギリシャ語やラテン語が分らなくてはサンスクリットが本当にわかるはずはないということでした。そして仏教を本当に理解するには、どうしてもそれに関連する西方の学が絶対に必要であり、同時にインドの土着語たるドラヴィダ語を知らねば駄目だといわれ(略)結局、イラン研究が足利先生に廻って来たわけです」。
- ¹¹ 足利の門下から伊藤義教、岩本裕、大地原豊が育った(『オリエント学インド学論集 足利惇氏博士喜寿記念』、616頁)。なお、辻直四郎・足利惇氏・田中於兎彌・土井久弥(1916 - 1983)は数年ずつ離れているが、いずれも東京府立第一中学卒である。
- ¹² 上岡弘二(編)「伊藤義教博士の略歴と著作目録」『西南アジア研究』48 (1998)
- ¹³ Cf. 『南アジア研究』1991、『東方學』第 60 輯の追悼文「辻直四郎先生に拝眉するまで」。なお、大地原の最初の弟子は、サンスクリット文学の小林信彦、イラン言語学の上岡弘二、インド現代言語学の内田紀彦である。
- ¹⁴ Cf. 『インド思想史研究』6 (1989)
- ¹⁵ ただし 1956. 4 - 1959. 7 の間、助手を務めている。
- ¹⁶ 『科学の名著』(朝日出版社)シリーズの『インド天文学・数学集』(1980)の配本に附属する月報(1980. 10. 15)に寄せた小文から引用。
- ¹⁷ 信大 NOW 第8号(1999. 1. 1 発行) <http://www.shinshu-u.ac.jp/html/now/now08/08now03sil5.html>
- ¹⁸ 「印哲」の他学会が、「日本印度学仏教学会」のように、インド学・仏教学の並走を掲げるのに対して、「インド思想史学会」は、むしろ意識的に仏教学を排除し、インド学・サンスクリットに特化・純化した特長ある研究者の集まりを形成する。しかし現状を見ても明らかに既に学会の構成分子は「思想史」の枠を越えている。
- ¹⁹ 2007、「學問の思い出-服部正明博士を圍んで-」、『東方學』113、173-202頁。たとえば以下の述懐は重要である。「始めた當時は、まだ大乘佛教の原典をそういう京都傳統の哲學的な立場から解釋して解明していくということを自分としてはやっていきたい」という氣持ちはあったんですけども、だんだんそれではいけないと思うようになっていきました。(179頁)。「長尾先生でも、佛教學の領域内では精密だが、佛教以外の領域にはあまり關心を向けてないという傾向がありました。私の場合、他の領域のことをやっているうちに、もう少しインド學一般的な基盤から佛教を理解して行かなければならぬのではないかということをだんだん感ずるようになりました」(179頁)。

- ²⁰ インド政府給費留学生としてのプーナ留学の期間は、1953年9月から1年間。その前年にパリ大学に1学年間、さらにその前にペンシルヴァニア大学に1学年間、それぞれ給費留学で在籍。
- ²¹ *Rig-Veda. Das heilige Wissen. Erster und zweiter Liederkreis. Aus dem vedischen Sanskrit uebersetzt und herausgegeben von Michael Witzel und Toshifumi Gotō unter Mitarbeit von Eijirō Dōyama und Mislav Ježić.* Verlag der Weltreligionen im Insel Verlag Frankfurt am Main und Leipzig, 2007. 京都大学開催の「インド思想史学会」において堂山英次郎氏より本著を頂戴した。記して感謝する。
- ²² 上山大俊との対談から。http://www.ryukoku.ac.jp/university/kouhou/shuppan/kohoshi/kohoshi46/taidan.html
- ²³ 『論集 古典学の再構築』、総括班研究報告I、42頁にある高崎直道による調整班代表からの報告。
- ²⁴ 『本』1982年6月号(講談社)、12-13頁初出。日本エッセイストクラブ編 83年度ベスト・エッセイ集、1983、『耳ぶくろ』、文藝春秋、219-222頁に再録。文庫本では、1986、文春文庫『耳ぶくろ』1986、217-220頁所収。
- ²⁵ 大地原豊、1961、「一「インド学」徒の弁明」、『日印文化』、11。
- ²⁶ パーニニ文法学のカルドナや、シヴァ教研究のサンダーソンという成功例を見るまでもなく、一流的パンデイットから習う重要性については強調するまでもない。パーニニ文法で知られるカルドナであるが、グジャラーティーの文法書も物している。
- ²⁷ 筆者は大会要旨において「しかして下田正弘は(文献学のディシプリンを中心にすべきであることに)反対するかもしれない」と書いたが、当日会場に見えた下田氏にうかがったところ「後藤先生の意見に全く賛同する」(私的な談話)のことであった。
- ²⁸ 本邦の本格的な写本研究の先達として、Strasburg の Ernst Leumann に学んだ荻原雲来(1869-1937)が挙げられる。仏教研究においては特に世界的業績が積み重ねられてきた。現在多くの写本研究がなされている。筆者もその1人である。
- ²⁹ この点に関しては、大会シンポジウムの会場で井狩彌介氏より質問を戴いた。シンポジウム後に会話をしたところ、「(皆で集まって)プロジェクトという形で解決していくのではないか」ということであった。大地原豊が幅広く各領域に学生を育てた最終目標もそこにあるとのことだった。
- ³⁰ その意味で、ヒンディー語とサンスクリット語を跨ぐ水野善文の活動は例外的である。「バクティ研究会」の活動など、マラーティー文献にも取り組んでいた島岩の急逝は、そうした意味でも悔やまれる。
- ³¹ 服部正明(カルカッタ→ハーヴァード→トロント)、大地原豊(ペンシルヴァニア→パリ→プーナ)は、後続世代と対照的に、インド留学と欧米留学の双方を体験している。梶山雄一(ナーランダー)は短期ではあるが、1961年7月から8月まで SOAS の John Brough、そしてその帰途、9月から12月までウィーンで Frauwallner のところに学んでいる(Selected Papers 卷末略歴および「インド学試論集」Nos. 4-5 参照)。梶山雄一は「海外の三人の師」として、サトカリ・ムカージー、プラフ、フラウルナーを挙げている。
- ³² 印哲の歴史にとっての象徴的な出来事として目に付いたものを拾い上げただけであり、網羅的な年表を意図したものではない。作成にあたって 2003、『論集 古典学の再構築』総括班研究報告Iを参考した。

参照文献

- 特筆すべき参考文献は、『論集 古典学の再構築』、総括班研究報告I、2003である。末木文美士、後藤敏文、赤松明彦、吉水清孝、桂紹隆他の報告を含んで非常に有益である。
- 赤松明彦、2003、「近代インド学の成立」、『論集 古典学の再構築』、総括班研究報告I、111-123頁。
- 大地原豊、1961、「一「インド学」徒の弁明」、『日印文化』、11、1頁。
- 、1980、「辻直四郎先生に拝眉するまで」、『東方學』、60、213-215頁。
- 堂山英次郎、2005、「リグヴェーダにおける1人称接続法の研究」、『大阪大学大学院文学研究科紀要・モノグラフ編』、45-2。
- 後藤敏文、2003、「インド学の未来像」、『論集 古典学の再構築』、総括班研究報告I、141-148頁。
- 原実、1991、「大地原豊氏の逝去を悼む」、『南アジア研究』、3、179頁。
- Hara, Minoru (原実) , 1980, *Indo Iranian Journal*, 22, pp. 147-148.
- 服部正明、赤松明彦、井狩彌介、桂紹隆、山上證道、徳永宗雄、2007、「学問の思い出—服部正明博士を圍んで—」、『東方學』、113、173-202頁。
- インド思想史研究会(編)、1989、「インド思想史研究」、6(服部正明博士退官記念論集)。
- 梶山雄一、1963、「ウェーン大学インド学研究所」、『インド學試論集』、4-5、93-95頁。
- 梶山雄一、1982、「マンガース物語」、『本』、講談社、6月号、12-13頁。
- 上村勝彦、2002-05、『原典訳 マハーバーラタ』、全8巻(未完)、筑摩書房。
- 上岡弘二(編)、1998、「伊藤義教博士の略歴と著作目録」、『西南アジア研究』、48。
- 桂紹隆、2003a、「インド仏教学の発展」、『論集 古典学の再構築』、総括班研究報告I、133-140頁。
- 2003b、「インド仏教学の未来像」、『論集 古典学の再構築』、総括班研究報告I、149-150頁。
- Kobayashi, Masato (小林正人), 2004, *Historical Phonology of Old Indo-Aryan Consonants*. Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- 国際仏教学大学院大学、2006、「原実教授略年譜」、『国際仏教学大学院大学研究紀要』、10, i。
- 京都大学百年史編集委員会(編)、1997、『京都大学百年史』、京都大学出版会。
- Mayeda, Sengaku (前田専学), and Junzo Tanizawa (谷澤淳三)、1991, *Studies on Indian Philosophy in Japan, 1963-1987*, *Philosophy East and West* 41-4, pp. 529-535.
- Mimaki, Katsumi (御牧克己) et al. (eds.), 1989, "A Brief Survey of Prof. Kajiyama's Career", Y. Kajiyama, *Studies in Buddhist Philosophy (Selected Papers)*, Kyoto: Rinsen Book, vii.
- 宮元啓一、2002、「インド哲学七つの難問」、講談社。
- 日本エッセイストクラブ(編)、1983、『耳ぶくろ』(83年度ベスト・エッセイ集)、文藝春秋、219-222頁。(文庫本では1986、『耳ぶくろ』、文藝春秋、217-220頁)。
- 末木文美士、2003、「日本における近代仏教学の展開と問題点」、『論集 古典学の再構築』、総括班研究報告I、151-159頁。
- 高崎直道、2001、「古典学の功績—インド学の場合—」(第5回公開シンポジウム基調講演 1, 2001. 3. 28)、『論集 古典学の再構築』、総括班研究報告I、41-47頁。
- Tsuchida, Ryutaro (土田龍太郎) and Alblecht Wezler(eds.), 2000, *Haranandalabari: Volume in Honour of Professor Minoru Hara on his Seventieth Birthday*, Reinbek.
- Witzel, Michael, Toshifumi Goto (後藤敏文), Eijiro Doyama and Mislav Ježić, 2007, *Rig-Veda. Das heilige Wissen. Erster und zweiter Liederkreis. Aus dem vedischen Sanskrit uebersetzt*, Verlag

- der Weltreligionen im Insel Verlag Frankfurt am Main und Leipzig.
- 上田昇、2001、『デイグナーガ、論理学とアーバハ論—比較論理学的研究—』 山喜房佛書林。
- 宇井伯寿、1947、『仏教汎論』、上巻、岩波書店。
- 山下博司、2004、『ヒンドゥー教—インドという〈謎〉—』、講談社。
- 矢野道雄(編)、1980、『インド天文学・数学集』、朝日出版社。
- 吉水清孝、2003、「インド学の発展」、『論集 古典学の再構築』、総括班研究報告I、124-132頁。
- 善波周、1978、「道心に食あり—若き日の足利先生—」、日本オリエント学会(編)、『オリエント学インド学論集—足利惇氏博士喜寿記念—』、国書刊行会、615頁。
- 原実、1980、「辻直四郎先生の長逝を悼む」、61、3-4号、130-144頁。

要旨

キーワード

印哲、インド学、仏教学

日本の「印哲」—東大・京大などにあるインド学・仏教学の研究—は欧米のIndologyとは性格を異にする。歴史を見ても印哲は「仏教学」とくに教理・教学の研究を中心にしてきた。伝統的・護教論的な仏教漢文の講読から、インド学の文献学的手法を加味した教理・思想研究へと展開し、そこから文献学の手法による客観的・実証的な思想史研究へと方向を定め、対象も方法も多様化してきた。中村以後を見渡すとき、極端な専門化が進行しているのが分かる。そしてそれは資源の集中という形で「学問的」には大きな成功を収めてきた。そこに抜け落ちたのは現代インドへの関心である。結果として、サンスクリット文献と現代を繋ぎ、そのギャップを埋めんとする情熱は低い。国際的な発信という成功の影で、国内一般向けの成果還元や他分野研究者との交流への意欲が減退しているかに映る。「中村元以後」の印哲、日本のインド学をどう方向付けていくのか、これからの課題である。

Summary

“Indian philosophy” in Japan: a retrospective

Kei Kataoka

Keywords: Indian philosophy, Indology, Buddhist studies, Buddhology

The so-called “department of Indian philosophy” in a Japanese university covers not only Indian (philological) studies but also Buddhist studies. Junjiro Takakusu came back from

Oxford University and was appointed the first Chair of the Sanskrit Department at the University of Tokyo in 1901. It is, however, hasty to conclude that Indian and Buddhist studies in Japan were mere imports from the West. In the beginning the main focus was on the doctrinal aspects of Buddhism. Such early studies were oriented towards the apologetics of Buddhist doctrine that “reached a climax in Japan”. Buddhist texts in classical Chinese were compared with Sanskrit, Pali and Tibetan sources through the western philological method. This comparative method, which is most typically observed in the works by Hakuju Ui, was followed by his successors as one of the most promising paths for Japanese scholarship. Essentially, “Indian philosophy” in Japan consisted (and still consists) of Indology, Tibetology and Sinology/Japanology. In 1943, Hajime Nakamura was appointed to the chair of Indian philosophy at the University of Tokyo. Unlike his predecessors and colleagues in the department, he was not a Buddhist monk. His appointment clearly marks a new era. Diversification of topics and methods are plainly visible in his works. In addition to philology, linguistics and philosophy, which had been the core of “Indian philosophy” in Japan, other perspectives such as historical study, anthropology, art history, archaeology and religious studies were introduced into the field. In Kyoto, the influence of French Indology was particularly salient. Susumu Yamaguchi (Otani University), who studied under Sylvain Lévi, also taught at Kyoto University as a lecturer. His style was inherited by Gadji M. Nagao. The famous “three Munis” in Kyoto University—Yutaka Ojihara, Masaaki Hattori and Yuichi Kajiyama—educated many scholars who sustain Japanese Indology today. Many of them studied in and attained their degrees in western universities. Ojihara’s dream of “participating in western Indology on equal footing” is a reality today. However, whereas rigid philology and specialization in each topic has led to international fame in the Academy, interest in contemporary India as well as the urge to return scholarly fruits to society and other disciplinary areas seem to have diminished among Japanese indologists. This has been particularly true after the deaths of Hajime Nakamura (1999), Katsuhiko Kamimura (2003) and other prominent scholars.

Published by The Japanese Association for South Asian Studies ©
C/o Institute of Oriental Culture,
The University of Tokyo,
7-3-1, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033, Japan
Telephone: 03-5841-5867
Fax: 03-5841-5898
E-mail: jasas@ioc.u-tokyo.ac.jp

編集協力 有限会社春樹社
装丁 柴永事務所(前田眞吉)
本文 DTP 柴永事務所

南アジア研究 第20号

2008年12月15日発行

編集・発行 日本南アジア学会

〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番地1号
東京大学東洋文化研究所気付
日本南アジア学会事務局

電話: 03-5841-5867
Fax: 03-5841-5898
E-mail: jasas@ioc.u-tokyo.ac.jp

印刷 モリモト印刷株式会社

販売取り扱い 株式会社毎日学術フォーラム
〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1丁目1番地1号
パレスサイドビル2F 東コア
電話: 03-6267-4550
Fax: 03-6267-4555